

武蔵学園で一時的に保護されたカワセミの幼鳥， および濯川でのカワセミの採餌行動の記録

白井 亮久¹・池原 満²・村松 茂樹³
(¹生物科・²埼玉県新座市・³千葉県市川市)

要 旨

2022年7月、武蔵学園大学三号館北側の駐輪場で左翼が傷ついたカワセミが発見され一時保護した。全長16cm程度の幼鳥で、学外から偶発的に入り込んだものと思われる。一次保護の後、東京都指定の動物病院に引き渡した。また同年9月と10月に、濯川で別個体のカワセミによる小型のアメリカザリガニの採餌行動を観察し、記録した。

Keywords: 生きもの地図，カワセミ，採餌行動，傷病鳥獣，都市鳥，バードストライク

はじめに

カワセミ *Alcedo atthis* はブッポウソウ目カワセミ科に属す、水辺に生息する小型の鳥である。英名で *Kingfisher* といわれるように水中に飛び込み、魚類や甲殻類、水生昆虫などを捕食する。構造色による美しい姿から「飛ぶ宝石」とも呼ばれる人気の高い鳥である。東京の都心でも大正や昭和初期には普通にみられたが（金子，1989）、都市開発による環境改変により1950年頃に練馬から見られなくなり（松田，1971：カワセミの後退図）、1980年代に再び見られるようになった（川内，1997）。これらは上下水道の発達などによる水質の改善だけでなく、都市の構造物に適応した繁殖などに起因するとされることから（川内，2015）、カワセミは東京の都市鳥の一つともいえる（金子，1991）。

水辺の多い東京都練馬区内では、現在ではカワセミはそれほど珍しい鳥ではなく、石神井公園や光が丘公園などの都市公園で普通にみられる（佐藤・北澤，2008；練馬区，2012；石神井公園野鳥と自然の会，2019）。崖や急斜面に横穴の巣をつくる習性から、護岸された都市河川のコンクリート壁面を利用して巣作りや繁殖を行っていることが知られ（川内，2015）、近隣の石神井川でも目撃がある。

一方、武蔵学園（東京都練馬区豊玉上）でカワセミを見かけることはほとんどない。学園内には循環型河川である濯川が流れているが、巣を作るような環境ではないため、カワセミの生息に適した場所はないものと思われる。実際、数年に何回かみられる程度で、定

常的には住んでおらず、練馬区の調査でも武蔵学園での記録はない（練馬区，2012）。

今年度，2022年の夏から冬にかけて，複数回にわたり学内でカワセミを見る機会があった。その中でバードストライクと考えられる傷害個体の保護事例と，別個体の濯川での捕食行動について報告する。

A. 構内で見つかったカワセミの傷害個体

A-1. 一時保護の経緯

2022年7月17日の朝8時頃，大学三号館の北側の守衛所近くの駐輪場で，カワセミ1個体が見つかった（地図，図版A）。左羽根が傷ついているようで，羽ばたこうとするも上手く飛び上がることはできず，じっとしていた。原則，危害の恐れのない野生生物にはどのような干渉もすべきでないが，この個体は三号館のガラス窓にぶつかったバードストライクの可能性があることから，今回の傷害個体を『人為的な要因で傷つき，かつ，治療により野生復帰が可能な場合（東京都環境局，online）』に該当するとして，保護することにした（なお，ドバトやカラスなどは東京都の野生鳥獣の保護の対象外）。傷害個体のカワセミを近くの守衛所で一次保護，東京都環境局自然環境部の鳥獣保護管理担当に問い合わせの後，練馬区内の都指定の動物病院に引き渡した。一時保護の際，段ボールに雑巾を引き，水や流動性の餌を用意したが，ほとんど口にできなかった。

保護されたカワセミの形態的特徴として，全長は16.4cm程度，頭部は青の斑，目元に白い線が入り，頭部2.7cmに対して嘴は3.2cmでカワセミ特有の長い嘴がみられた。首は白で，腹側は少し黒ずんだ白～淡褐色，背側は深緑で中央にコバルトブルーの特徴的な綺麗な縦帯が入る（図版A）。口の中はオレンジ色だった。下肢の表側は黒く，裏側がオレンジであること，胸が褐色でなく黒みが残ることから幼鳥とみられた（図版A）。嘴の下部がオレンジ色を帯びメスの特徴を有するが，幼鳥での判別は難しいようである。カワセミは3月～8月に繁殖し，40日程度で親元を離れ採餌することから（紀宮ほか，2002），巣立ちした個体の可能性もある。間もない巣立ち雛にみられる嘴の先端の白色はみられなかった。

傷害の様子として，左翼の手根中手骨の辺りから流血した形跡があり（図版A），羽ばたいても飛び上がれず，左腕の翼が上手くたためないことがあった。一次保護から2日後に引き取り手の病院が見つかり，練馬区中村橋の動物病院に引き渡したところ，左翼の骨折と診断され施設内で治療を受けることになった。しかしながら，その後死亡が確認された。

A-2. 傷害個体が見つかった場所の特徴とその後の対処

武蔵学園構内では落鳥個体が見つかることがしばしばある（白井調べ）。カラスなど他の鳥類に襲われたもののほか，ガラス窓にぶつかるバードストライク（bird collision）で死ん

だと思われるものも少なからずある。今回傷ついたカワセミが見つかった三号館北側の駐輪場付近では、2017年にもヒヨドリの落鳥個体が見つかったことがある場所で、飛んでいたカワセミがガラス窓に気付かず、ぶつかった可能性もある。バードストライクでは嘴や頭部に損傷が見られることが多いが、今回そのような傷は見られなかった。直前にガラス窓に気付き、避けようとして左翼をぶつけたのかもしれない。近くのガラス窓表面に油脂跡なども見つからなかった。いずれにせよ飛べない状態でその場所にいたことから、学内で怪我をしたものと考えて差し支えないだろう。昨年2021年12月にも3号館近くの大学一号館の全面ガラス窓へのバードストライクによる猛禽類のハイタカ幼鳥の落鳥も確認されており、学内でも都市に適応した生き物との自然との共存を考えた対処が求められる。

後日、第一著者が国立科学博物館附属自然教育園(港区)の観察会に参加した際、講師の矢野亮さん(同名誉研究員)からカワセミについて聞くことができた。矢野さんはカワセミの子育てを成功させた方で著書も多数ある(矢野, 1996; 矢野, 2009 など)。カワセミの幼鳥への給餌は、嘴を開いての強制給餌が有効とのことだった。その際、モソゴは鰓が引っ掛からないように頭部から、ザリガニであれば同様に鰓が引っ掛からないように尾部から給餌するのが良いとのことだった。また、2~3日給餌が途絶えると死んでしまうこともあるようで、今回、動物病院での保護下での死因は、怪我前後の食糧不足による衰弱死もあったかもしれない。今後の参考としたい。ただし、野鳥の長期に渡る保護飼育には、東京都の許可が必要である(矢野, 2009)。

B. 濯川でのカワセミの採餌行動の記録

次に、前項で述べた傷害個体とは別個体のカワセミによる採餌行動が、2022年9月に濯川で見られたので報告する。2022年9月13日(火)の午前9時ごろ、濯川の櫛橋付近の川岸の石にいるのを第三著者が確認した(地図, 図版B)。下嘴は黒くオス個体とみられた。繁殖期は過ぎているため巣立ちをした個体の可能性もある。川縁の石に留まり、水面を見つめており、一度50cmほどジャンプし、勢いよく水に飛び込み、また同じ場所に戻って捕食した(図版B: 動画 <https://youtube.com/shorts/YGs2q7fOXzg>, 撮影: 村松)。嘴で捉えた後、何度か足元の石に獲物を叩きつけ、弱らせてから食べる様子が観察された。一時間程度その場に留まっていたようで、複数回の採餌行動が見られ、そのうちの数回では小型のアメリカザリガニの捕食が確認された。餌となったザリガニの大きさは、カワセミの嘴の長さより少し大きい程度であった。

後日、採餌したカワセミがいた場所を見ると、いくつかのフィールドサインが確認できた。川岸の護岸のための石と地面に生えた植物(ロゼット)には白い糞の直線的な跡がついていた(図版B)。カワセミは水様性の糞を後方に飛ばす習性があり、その痕跡の可能性

がある。そのような糞は 1.5m 程度の範囲に三か所の糞が見つかり、もしカワセミのものであれば、長い時間そこで採餌していたことを間接的に裏付けるともいえる。その近くには死んで乾燥した小型のアメリカザリガニがあった（図版 B）。カワセミが採餌したものは不明であるが、動画から確認できたアメリカザリガニと近い 4cm 程度の大きさのものであった。

武蔵学園で 20 年以上仕事をしている第三著者によれば、これまで数年に一回の頻度で構内のカワセミを見かけることもあり、生息はしていないものの稀に採餌などに訪れるようだ。都市のカワセミは、改修された人工的環境の河川にも適応し、水質汚染にも強いモツゴなどを食す（金子，1989）。先ほど述べた都内の港区の自然教育園で繁殖したカワセミの食性を調べた矢野（1996）によれば、主にモツゴとアメリカザリガニ、そのほかヨシノボリやスジエビ・金魚などが対象となっていた。濯川にも、アメリカザリガニやモツゴのほかカタモロコ、メダカ、シナヌマエビ（田中俊輔，調べ）などのカワセミの餌資源となるものが豊富にみられ、子育て中の親個体や夏以降の巣立ち個体など偶発的に入ってくるものと思われる。

C. その後の目撃情報と目撃

C-1. 目撃情報

2022 年 10 月 8 日(土)の 14 時～17 時にかけても、再び構内でカワセミの目撃情報があった。13 時 37 分に濯川上流の喜寿島対岸のカキツバタの植栽がされている場所のカキツバタの標識に留まっているのを複数の生物部の部員が見かけた。14 時 9 分には、前項 B と同じ櫛橋付近の川辺にいるところを別の部員がみつけ（地図）、近づいたところ上流の方へ向かって飛んで行ったとのことである。また 16 時 59 分から 17 時 17 分にかけて、再び喜寿島対岸のカキツバタ植栽の場所でも目撃があった（複数の生徒からの情報）（地図）。カキツバタ植栽の場所は浅い水辺で、アメリカザリガニも多く植栽された株が刈られてしまうという被害もある。カワセミはこの場所でもザリガニの採餌をしている可能性がある。目撃された個体は 1 羽で、下嘴は黒くオスで、どれも同じ個体と思われる。

なお、この日は午後到高 1・高 2 の保護者会と二回の学校説明会が同時開催されていた。普段は生徒の少ない土曜日とはいえ、学園内に人の往来の多い日でもあった。そうした中でもカワセミが来ていたことは若干の驚きである。

C-2. 冬の目撃

また、2023 年 1 月 28 日(土)の 9 時 40 分～15 時 30 分頃まで、再び濯川でカワセミが確認された。1 羽で、下嘴がオレンジ色でメス個体だった。はじめ喜寿島近くで確認され、

中之島など上流部付近にすることが多かった。地上,あるいは2m~3mと低い位置の枝に留まっている様子がみられ,採餌行動を直接確認できなかったが,濯川にいる獲物を狙っていたと思われる。警戒心が強い個体ようで,観察者に気付くとすぐに下流方向に逃げていき,再び,上流に戻ってくることを繰り返していた。下流に向かう際には,水面から1mほどの低い位置を流路に沿って直線的に飛んでいった(地図)。一の橋の下の高さ1m程度のトンネル内を通過して飛んで行く姿もみえた。午前から午後まで断続的に観察されたことから,ほぼ一日中一個体が濯川周辺に滞在していたと思われる。なお,翌日は観察されなかった。

2022年7月の傷害個体から,翌年1月まで構内で確認されたカワセミの記録を表にまとめた。

表. 2022年度に武蔵学園構内で確認されたカワセミの記録

確認された日時	場所	状態・行動	本報告の項目
2022年07月18日(月/祝) (8時頃)	大学三号館北側, 東の駐輪場	バードストライクによると思われる左翼の傷害個体	A
2022年09月13日(火) (9時頃から一時間程度)	濯川中流(櫛橋付近)	オスの採餌行動	B
2022年10月08日(土) (14時~17時頃)	濯川中流(櫛橋)~上流域 (喜寿島対岸のカキツバタ)	オスの採餌行動 (生物部ほかより)	C-1
2023年01月28日(土) (9時半~15時半頃)	濯川上流域(喜寿島付近)	メスの採餌?。下流方向に逃げるも, また喜寿島付近に戻る	C-2

D. 武蔵に来るカワセミはどこから来ているか

武蔵学園でみられるカワセミがどこから飛来しているのだろうか。カワセミは数百mから1kmほどの縄張りを持つとされるが,詳細な行動範囲についての研究はあまりない(紀宮ほか, 2002; 内田, 2022)。矢野(2009)は,港区白金にある自然教育園内(20ha)でのカワセミの繁殖・行動を記録し,餌とした金魚が2.5km離れた養魚場から採取してきたものではないかと記述している。それを当てはめ武蔵学園を中心に地図上に2.5kmの円を描くと,そこに入る水辺は北の石神井川(直線距離約1300m,以下同じ),南の江古田川(650m),妙正寺川(2km)が含まれ,これらの場所が可能性の高い候補地といえる。そのほか,2.5kmより外の範囲の練馬区・中野区・杉並区でカワセミが良く観察される場所としては,神田川(3.6km),光が丘公園(4.6km)や石神井公園(6.3km),和田堀公園・善福寺川(6.3km),善福寺公園(7.3km),大泉井頭公園・白子川(8.2km),武蔵関公園(9.0km)がある(これらの場所すべてで繁殖しているかどうかは不明)。

また、事例は少ないが、紀宮ほか（2002）では皇居（千代田区）で標識個体した個体が24km離れた清瀬市の金山緑地公園で見つかったこと、内田（2022）では8月に埼玉県嵐山町で個体識別した幼鳥個体が10月に33km離れた東京都東久留米市でみつきり越冬定着したことが報告されている。このように移動分散は広範囲に渡るようで、武蔵学園にも遠く離れた場所からも飛来することがあるのかもしれない。

今回、大学三号館北側の駐輪場で見つかった傷害個体に限れば、北方面から飛んで来たこと、移動能力がそれほど高くない幼鳥であることを踏まえると、石神井川から来た可能性が高いのではないだろうか。白井（2023）のアオサギの報告でも触れたが、武蔵学園でみられる生き物がどこから来て学園をどう利用しているかは、武蔵学園の自然を理解するうえで大事な観点のひとつと思われる。

おわりに

2022年度の夏から冬にかけ4度、武蔵学園構内でカワセミを見る機会を得た。「翡翠」ともよばれるカワセミは一目でそれと分かり、見る人の心をワクワクさせる。カワセミは「チー」という自転車のブレーキがきしむような地鳴きをしながら飛ぶため、いつかまた鳴き声から構内に来ていることに気付けるかもしれない。武蔵学園の濯川という水辺には、カワセミの餌となる魚類・甲殻類が生息し、澄んだ水が流れている。また、川岸の護岸のための石や水辺に張り出した低木の枝は、採餌の待機場所として適しているともいえる。

最後に、福田泰二さん（30期）から、当時中学3年だった70年前（1953年頃）に濯川でカワセミを見たという情報を得ることができた。これは東京からカワセミが姿を消す直前のものである。その後姿が見えなくなった東京で、鳥類学者の故・柿澤亮三さん（37期）は、創立60周年記念事業として始まった濯川蘇生計画を前に、いつか再生した濯川でカワセミの1つがいの繁殖を願っている（柿澤，1983）。工事後、濯川は現在のかたちとなり、カワセミがふらっと来るような環境が武蔵学園で成立している。今後もこのような光景がみられることを望む一方で、今いるカワセミは都市河川に適応したモツゴや外来種のアメリカザリガニを主な餌資源として生きていることも、現在の都市の自然の姿であることを忘れてはいけない。それらを踏まえこれからも武蔵学園に今ある自然をみつめていきたい。

謝辞

本報告にあたり、2022年10月8日のカワセミの目撃情報について、岡畑直樹君（高校1年，99期）と生物部の部員にはお世話になった。特に生物部の塚田弓絃君と泉楽大君には写真の掲載許可を、田中俊輔君には濯川に生息するエビ類について教えて頂いた（いずれも中学3年，100期）。また、矢野亮さん（国立科学博物館附属自然教育園名誉研究員）と

福田泰二さん(30期, 学園記念室名誉顧問)からは有益な情報を頂いた。88期卒業生の高田陽さんには, 原稿に目を通して頂きご助言を頂いた。記して御礼申し上げる。

※追記: 脱稿後の2023年3月3日~14日時点にも, 水位が下がった濯川下流付近を餌場にした幼鳥雌1羽が観察され, ザリガニを採餌する姿が何度も目撃されている。

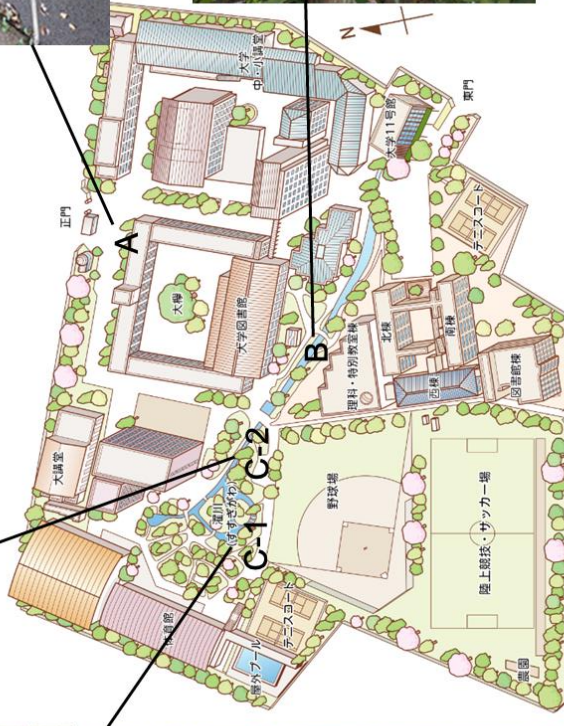
引用文献

- 柿澤亮三. 1983. カワセミが住みつく環境. 武蔵高等学校同窓会会報 25: 20-23.
- 金子凱彦. 1989. 帰ってきた東京のカワセミ. *In*: 都市鳥研究会(編). 都市に生きる野鳥の生態. 24-27. 154pp. 都市鳥研究会, 東京.
- 金子凱彦. 1991. カワセミ たくましい適応力で都心に復活. 週刊朝日百科動物たちの地球 27: 7-74-7-77.
- 川内 博. 1997. 大都会を生きる野鳥たち. 245pp. 地人書館, 東京.
- 川内 博. 2015. カワセミ 一時は姿を消した東京のカワセミ. ユリカモメ 719: 16-18.
- 松田道生. 1971. 減少する東京のカワセミ. 野鳥 36(6): 300-305.
- 練馬区. 2012. 練馬区自然環境調査報告書(平成24年3月). 387pp. 練馬区環境まちづくり事業本部環境部みどり推進課, 東京.
- 紀宮清子・鹿野谷幸栄・安藤達彦・柿澤亮三. 2002. 皇居と赤坂御用地におけるカワセミ *Alcedo atthis* の繁殖状況. 山階鳥類研究所研究報告 85: 1-5.
- 佐藤方博・北澤哲弥. 2008. 光が丘公園バードサンクチュアリにおける鳥類の観察状況—2003年度—. 工房のたまご(生態工房調査研究報告集) 4: 33-66.
- 石神井公園野鳥と自然の会. 2019. 石神井の四季30年 資料編. 128pp. 東京.
- 白井亮久. 2023. 濯川に落ちていたペレットの痕跡と武蔵学園構内で観察されたアオサギ幼鳥とサギ類. 武蔵高等学校中学校紀要 7: 139-150.
- 東京都環境局. online. 野生鳥獣との接し方について.
https://www.kankyo.metro.tokyo.lg.jp/nature/animals_plants/birds/faq.html (2022/09/21 確認)
- 内山 博. 2022. 近所のカワセミはいつも同じカワセミなのか?. *Birder* 36(04): 28-29.
- 矢野 亮. 1996. 帰ってきたカワセミ. 174p. 地人書館, 東京.
- 矢野 亮. 2009. カワセミの子育て. 218p. 地人書館, 東京.

Akihisa SHIRAI, Mitsuru IKEHARA and Shigeki MURAMATSU (2023) Notes on the common kingfisher temporarily protected on the Musashi academy campus, Tokyo. *The Musashi Bulletin* 7:151-160.



A: 傷害固体の発見場所



B: 採餌の場所

C-1: カキツバタの標識に留まる

地図. 武蔵学園構内でカワセミが確認された場所 (武蔵学園HPの構内図を元に作成)

- A. 2022年7月に傷ついた個体が発見された大学三号館北側
- B. 2022年9月に採餌行動をしていた濯川中流の榎橋付近 (写真協力: 西沢光太郎, 岡野航太郎)
- C-1. 2022年10月に採餌行動の目撃情報があった濯川上流のカキツバタの浅瀬
- C-2. 2023年1月に確認された場所

図版 A. 一時保護されたカワセミ



(説明)

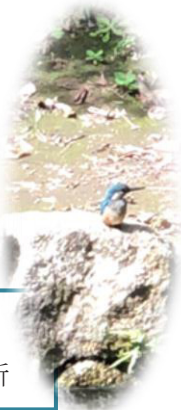
- A. 発見時の様子 (場所: 大学三号館北の東側の駐輪場)
- B. 保護中の写真。左翼に血痕がある (矢印で示した)
羽ばたこうとするも飛ばず, 羽をうまくたたむことができない
- C. 胸部に黒みが残り, 肢も黒色であることから幼鳥 (巣立ち雛) とみられる

図版 B. カワセミの採餌行動

連続写真（動画のキャプチャ画面を右から左に並べた。1.5秒間の連続写真，撮影：村松）



採餌のために
留まっていた場所



A. 待ち伏せていた川岸にあったカワセミの水様糞と思われるもの（赤丸で示した）



B. 川岸に落ちていたザリガニ（カワセミが採餌したものかどうかは不明）